

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19592531

研究課題名（和文）子どもの親・同胞との死別による喪失体験と支援のあり方の検討

研究課題名（英文）Exploring Ways to Support Children Whose Families Experienced a Death of Their Family Members

研究代表者

荃津 智子（KUKITSU TOMOKO）

天使大学・看護栄養学部・教授

研究者番号：10177975

研究成果の概要（和文）：

小学生の子どもをもつ養育者 868 名を対象に、子どもの「死」に関する体験、子どもと「死」について話すこと、死別を体験した子どもへの対応に関する内容を調査した。子どもの体験は、ペットとの死別約 50%、通夜・葬式の出席、病気のお見舞いの体験は 85%以上、死別の体験は 42%であり、普段から子どもと「死」について話をすることのあるものは約 70%で、ニュースの事件や話題がきっかけとしている。親の 80%以上は、子どもと「死」について話すことは大切であると考えていた。しかし、30%の親はほとんど話すことがなかった。

また、死別体験をした子どもをもつ親へのインタビューでは、子どもと死について話す機会を持つことの大切さを感じ、死別体験の有無が子どもの生や命の捉え方に大きく影響していることを実感していた。一方、メディアから入る情報に子どもたちが、影響を受けることへの危惧、親の考えを伝えることの難しさも強く認識していた。今後子どもの死別体験がある場合も含め、子どもと親が、生・死の問題をともに考えていくあり方を検討していく必要性がある。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to explore how children respond to their experiences of death and other related forms of loss, as well as examining what kinds of communication exist between children and their parents regarding death and loss experiences. Subjects were 868 parents with children from 1<sup>st</sup> grade through 6<sup>th</sup> grade volunteered to participate in the study. Common loss experiences amongst the children were the attending of funerals and visiting sick family members (85%), loss of a pet (50%) and follows death of parents/grandparents (42%). Of those parents, 70% said they had a conversation about death and dying with their children on a daily basis, and many said that social problems and news reports concerning murder and suicide cause them to bring up that conversation. Many parents believe that it is important to have “death-related” conversations from early on in their children’s lives, but more than 30% of parents reported that they never had an opportunity to have such discussions with their children. While the desire of parents to provide death education for their children is quite strong, according to the results only 30% of parents have such opportunities to communicate with their children about death and loss experiences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：子ども、死別、喪失体験、悲嘆、親と子

### 1. 研究開始当初の背景

欧米においては子どもの死別による悲嘆、喪失体験については、研究が進み子どもの死別体験が、適切な支援を受けないまま放置されることは、子どもに心理的苦痛を引き起こすことになることが指摘されている。そのため、子どもにとって大切な人との死別に際しては、一緒に過ごす、語る機会を持つなど子どもへの支援の取り組みが進んでいる。子どもにとって大切な人との死別は、危機的出来事であり、適切なサポートが必要であることは欧米の研究でも明らかであるが、わが国では、大人と子どもが「生・死」の問題を向き合い考える機会が多いとはいえないのが現状である。村井(1996)は、大人や教師が「死」は知の対象ではなく、「死について考えても仕方がない」と考えているからであること、2つ目に大人や教師の内面にも死に対する恐怖があり、死について語りたがらない、語ろうとしない「死のタブー」が形成されているからであると指摘する。著者ら(2000)の調査では、小学4～6年でペットや身近な人との死別体験は7割前後の者が体験していると答えているが、家族と死について話したことがあるものは4割弱であり、年齢が進むにつれ話したことがあるという経験は減少する傾向にあった。上菌(1996)の調査でも、ペットとの死別体験は7割を超えるが、死に関わる質問をしたことがあると答えているものは1割前後と報告されている。

これらのわが国の子どもと「死」について語ることが一般的とはいえない状況である背景などを踏まえ、大切な人との死別を体験した子どもやその家族への支援方略を考えるためには、子どもの大切な人と死別体験を取り巻く状況を系統的に明らかにし、検討を加えていく意義は大きいと考えた。

・村井淳：Ⅲいのちの授業をつくる、性の授業 死の授業、金森俊明・村井淳志、198-199、教育史料出版会、1996。

・岡田洋子他：子どもの「アニミズム・死の概念発達」と生活体験—Death Education の方略を求めて—、平成10～12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書、2001。

・上菌恒太郎：子どもの死の意識と経験、長

崎大学教育学部教育科学研究報告、51、15-25、1996。

### 2. 研究の目的

大切な人と死別した子どもへの支援のあり方を検討するにあたり、死別体験をもつ子どもへの支援は、子どもを取り巻く家族の「生・死」、「子どもと死について語ること」への考えや認識に大きな影響を受ける。そこで、以下の視点から検討を進める。

(1) 子どもをもつ親が、子どもと「生・死」について語ることについての意識、認識を明らかにする。

(2) 死別体験のある子どもをもつ親が、子どもの死別体験を通して考えたこと、体験したこと、実際に子どもへの関わりなどを明らかにする。

(3) 死別体験のある子どもの悲嘆、喪失体験を明らかにする。

(4) 死別体験の子どもとその家族への支援方略について検討する。

### 3. 研究の方法

(1) 子どもをもつ親が、子どもと「生・死」について語ることについての意識、認識

- ①対象は、小学生の子どもをもつ親
- ②無記名自記式質問紙による実態調査
- ③調査内容は、子どもと「生・死」を語ることへの意識や日頃の状況、子どもの死別体験の有無などから構成される内容。
- ④調査の依頼及び回収は、小学校の校長会などの協力を得て、調査協力の得られた小学校で在学全世帯への調査用紙の配布を依頼、回収は被調査者からの郵送による返送。
- ⑤分析は、単純集計及び項目間のクロス集計を実施。
- ⑥倫理的配慮として、質問紙配布時に研究の目的、無記名による任意参加であること、データはすべて統計処理され、個人が特定されることがないこと、関連学会等での公開を予定していることなどを書面により説明を行なった。質問紙の返送を持って同意を得たとした。研究代表者の所属大学の研究倫理委員会の審査を経て了解を得た。

(2) 小学生の子どもをもつ親が、子どもの死別体験を通して子どもとの関わりから

考えたこと、体験したこと、日頃から生・死の問題に対して子どもとの関わりで考えていること

- ①対象は、研究目的1の質問紙調査の協力者の中で、面接への協力、同意が得られた者。死別体験をもつ子どもをもつ親及び死別体験はないが小学生の子どもを持つ親。
- ②データ収集は、質的帰納的調査法を用いたグループインタビューによる半構成的面接法により実施。
- ③調査内容は、死別体験のある子どもの親へは、親から見た子どもの様子や状況、死別児の子どもへの親としての対応やその時の思い、生や死をめぐる子どもを取り巻く環境などの視点。  
死別体験のない子どもの親へは、日頃からの生や死をめぐる子どもを取り巻く環境や親としての考えていること、行動していること、思うことなどの視点でインタビューを行った。
- ④面接は、死別体験を持つ子どもの親(19名)と死別体験のない子どもの親(10名)を4~5名のグループメンバーで構成し、グループインタビューを行った。
- ⑤分析は、面接内容を逐語録で起こし、質的帰納的研究分析方法に従い分析を行い、面接内容を抽象概念化する作業を行った。
- ⑥倫理的配慮として、研究の目的、任意参加であること、インタビューデータはすべて個人が特定されない形で処理されること、関連学会等での公開を予定していることなどを書面により説明を行ない、同意書による同意を得た。研究代表者の所属大学の研究倫理委員会の審査を経て了解を得た。

#### 4. 研究成果

(1) 子どもをもつ親が、子どもと「死」について語ることについての意識、実態

小学生の子どもをもつ親 868 名に行った調査内容は、子どものペットとの死別や親しい人のお見舞いの体験、子どもの死別体験、親と子どもが「死」について語ることの意識などについて調査した。その結果、子どもの通夜、葬式への出席、病気のお見舞いなどの体験は 85%以上、死別体験は 42%であった。その内訳の7割は、祖父母との死別であった。これらの結果は、他の調査結果と比較しても子どもにとって生や死にまつわる出来事が子どもの生活から極端に減少しているという状況とはいえない。また、死別体験を持つ子どもの親は、その9割以上は、死別の時に子どもと「死」について話していた。一方「子どもが死について不安があるので話をごまかしている」など話をしなかったものは1割

弱いた。親全体の5割も、子どもが誰かと死別した時には、子どもに分かる範囲で話したいと考えていた。

普段の生活の中でもニュースや事件などを機会に子どもと「生」「死」について話すと7割の親が回答していた。その他には、話す機会は、「身近な人が亡くなったとき」、「身近な人が病気になったとき」「ペットが死んだとき」、「学校の話や出来事を通して」などをその機会としていると回答していた。

しかし、3割の親は、子どもとこれらの話題を話す機会がないと回答し、「子どもと一緒に死の問題を今から考える必要はない」、「小学校前には教えなくてよい」などの回答も少数ではあるがみられた。

今回の調査では、親は子どもと「死」について話すことは比較的高い関心を持っているといえる。しかし、岡田ら(2001)や上藪(1996)の子どもを対象に実施した調査では、ペットとの死別や葬式、死の話題などを親と話したことがあると答えている子どもは1~4割前後という結果であった。対象者の特性や調査方法、内容なども考慮すれば単純な比較はできないが、今回の親の意識と子どもの反応に差があることが伺われる。この違いは、社会背景の変化に伴い親の関心が高くなっているのか、または、回収率等から推察して回答を寄せた親の関心が、比較的高い集団であるためなのかは判断しがたい。

しかし、今回の結果では、親の迷いや戸惑い、子どもが幼いうちには話す必要がないと考える親がいることも事実であり、これらは、子どもにとっては十分に疑問や気持ちを親と共有できないと感じることにつながる可能性がある。調査中の自由記述の中に親自身が、小学校低学年のときの死別の体験として気持ちの表現ができずに苦しかった体験を述べていたものがあつた。これらなどは、子どもが大切な人の死という出来事に直面したときに、子どもの側にいる人の関わりを考える上では多くの示唆を含むものといえる。

(2) 小学生の子どもをもつ親が、子どもの死別体験を通して子どもとの関わりから考えたこと、体験したこと、日頃から生・死の問題に対して子どもとの関わりで考えていることについて(質的帰納的調査)

小学生の子どもを持つ親を対象にインタビューの協力が得られた29名を対象にグループインタビューを実施した。方法は、子ども自身には死別体験がない親10名を対象に3グループのグループインタビュー(母親9名、父親1名)と子どもに死別体験がある親19名(母親15名、父親4名)を対象に4グループのグループインタビューを実施した。

インタビュー結果は、質的分析法により語られた内容を逐語録として起こし、意味内容を抽象概念化しカテゴリーを抽出した。

#### ①死別体験のない子どもを持つ親の生・死の問題に対する意識

語られた内容から6カテゴリーを抽出した。子どもを取り巻く環境への不安や心配：子どもたちが生や死を軽んずるような言葉やそのような出来事が氾濫するメディア、ネットやゲームに子どもがさらされていることなど、子どもの環境への不安や心配を表現していた。

子どもの態度・反応に対する信頼と危惧：子どもが「死ね」「殺す」などの言葉を軽く使うことへの危惧と同時に、出来事を通して生の問題と向き合うわが子への信頼を寄せる思いを表現していた。

親の子どもへの関わり方に対する迷い、手探り：親が大切なことを伝えたいと思う一方、親の価値を押し付けているだけではないか、もっとはっきり言うほうがよかったのではという親としての関わり方に対する迷いや悩む思いを表現していた。

学校・社会への不満と期待：学校の生や死の問題への取り組みに対して、親と学校や親同士の連携のなさ、それらを扱う教師の子どもへの関わり方に対する不満、一方では学校や教師以外の専門職に対するこれらの問題への取り組みなどの期待を表現していた。

子どもに伝えたい思い・考え・価値：親の子どもに伝えたい価値や向き合う様子を表現していた。

親を取り巻く環境への戸惑い：親自身が生きてきた背景と現代の環境との違いや変化の中で、子どもと生や死についての向き合い方への戸惑い、迷いの思いを表現していた。

以上、子どもにとって好ましいとばかりいえない環境の中で、また、親自身も社会の影響を受けながら子どもに伝えるべきことを模索し向き合う親の姿が明らかになった。

#### ②死別体験のある子どもを持つ親の生・死の問題に対する意識

6～12歳代の死別体験のある子どもを持つ親を対象に、親から見た死別体験した子どもの状況、子どもとの関係や思い、生や死をめぐる子どもを取り巻く環境などの視点から語られた。

その結果、親は死別体験した子どもに対して、「ショックが大きかったようだ」「冷静に受けとめていた」「淡々としていた」という印象を語った。一方で、子どもが仏壇に語る姿、供え物をする行為を目にし、死者をいたわること、子どもなりに死後の世界を抱いて

いることを感じていた。

いじめられている子どもや自分と同じように死別体験をした友人に対する思いやりをもち、「死ねって言う言葉はすごく悲しい」など、死別体験により子どもが死や命に対する理解を高めていること、死別体験後、子どもの行動や思いに変化があることを語った。

親自らが子どもと同様大切な人を亡くした当事者であるため、自分が喪失による悲しみや余裕のなさから子どもの思いに気づけなかった申し訳なさを語った。また、自分の喪失体験と子どもの示す反応と比較していることもあった。

親は子どもが死別体験によって表現する様々な行動や思いを、日々の生活の中で共有し生や死について語りあうことの大切さを強く感じていた。

一方で、子どもの現実にはゲームというバーチャルな世界が存在し、それらの世界では死が作為的に引き起こせることから、子どもへの影響を危惧していた。

同じ年代の子どもをもつ親には死別体験が少ないことから、親同士で子どもに生や死を伝えることを語りあうことの難しさを実感していた。

この調査を通し、死別体験をした子どもをもつ親は、子どもと死について話す機会を持つことの大切さを感じ、死別体験の有無が子どもの生や命の捉え方に大きく影響していることを実感していた。一方、メディアから入る情報に子どもたちがどのように影響を受けるか、自分の意図することが伝わっているのだろうかなど子どもと死について向き合って話をするものの難しさも親は、強く認識していた。

以上、研究成果(1)、(2)より、小学生を持つ世代の親は、子どもと死の問題を語る意義を感じている親が多い一方、子どもと死の問題を語ることに戸惑いやまだ早いと感じている親がいることが明らかになった。インタビューからは、親同士もこれらの考えにお互いのギャップを感じていることや死の問題に関する現代社会の変化に危惧を持っていることも明らかになった。

子どもを取り巻く死の問題は、現代社会において決して少なくなっているわけではない。また、子どもが、死別や死の問題に取り残されることのないように、死別の喪失や悲嘆の問題に子ども自身が、向き合うことができるためのあり方とその重要性、その構築に向けた取り組みをさらに発展させていくことが次の課題となる。

親へのインタビューは当初予定していたのは、死別体験のある子どもを持つ親だけであったが、質問紙の返送時に子どもに死別体

験はない親からも、これらの問題について語る機会を持ちたいという申し出が少なくなかった。そのため小学生の子どもを持つ親の認識を幅広く質的調査においても行うことにした。そのため当初の予定より親を対象とした質的データ収集、分析に多くの時間が割かれ、研究期間中には当初に予定していた研究目的の子どもの喪失や悲嘆の実態及び支援方略までの取り組みには至らなかった。これらについては、今後の継続課題として発展させていく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1. 荃津智子, 小林千代, 井上由紀子, 岩本喜久子, 岡田洋子, 工藤悦子, 小学生をもつ親が子どもと「死」について話すことの意識と実態. 天使大学紀要, 2009, 9, 81~92.

[学会発表] (計4件)

1. 荃津智子, 工藤悦子, 小林千代, 井上由紀子, 岡田洋子, 小学生の親が子どもと「死を語る」ことに関する意識と実態, 第55回小児保健学会, 2008, 9, 札幌.
2. 井上由紀子, 荃津智子, 小林千代, 工藤悦子, 岡田洋子, 身近な人と死別した子どもをもつ親が子どもと「死を語る」ことに関する意識と実態, 第55回小児保健学会, 2008, 9, 札幌.
3. 小林千代, 荃津智子, 工藤悦子, 井上由紀子, 岩本喜久子, 岡田洋子, 小学生の子どもをもつ親の生・死の問題に対する意識. 第15回日本臨床死生学会大会, 2009, 12, 東京.
4. 井上由紀子, 岩本喜久子, 岡田洋子, 小林千代, 荃津智子, 工藤悦子, 死別体験のある子どもの親の生・死の問題に対する意識. 第15回日本臨床死生学会大会, 2009, 12, 東京.

[図書] (計1件)

1. 荃津智子, 第1章 現代社会に生きる子どもと家族が抱える今日的な健康問題、3 現代社会と子どもの生と死, 岡田洋子, 荃津智子, 井上由紀子他、小児看護学1, 医歯薬出版, 2010. (2010. 10 発行予定)

[その他]

ホームページ等

#### 1. ホームページの開設

<http://kukitsu.tenshidaigaku.net/>

#### 2. 子どものグリーフケアを考える会開催

研究期間中、子どものグリーフケアを考える会を3回開催し、子どもを亡くした家族、専門職などが参加し、研究成果などの紹介や子どものグリーフケアに関する関心を高める活動の実施。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

荃津 智子 (教授)  
天使大学看護栄養学部  
研究者番号: 10177975  
2007~2009 年度

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

1. 井上 由紀子 (准教授)  
日本赤十字北海道看護大学看護学部  
研究者番号: 00320557  
2007~2009 年度
2. 岡田 洋子 (教授)  
旭川医科大学医学部  
研究者番号: 90281906  
2007~2009 年度
3. 小林千代 (准教授)  
天使大学看護栄養学部  
研究者番号: 60299732  
2007~2009 年度
4. 岩本喜久子 (特任助教)  
札幌医科大学緩和医療学講座  
研究者番号: 30513692  
2008 年度、2009 年度
5. 工藤悦子 (助手)  
天使大学看護栄養学部  
研究者番号: 70438422  
2007 年度、2008 年度